

## 巡検報告

# 風 布 巡 検

近 藤 優 子

後期試験を終えて間もない2月21日に、1年生にとって2回目の巡検である風布巡検が、三上先生と青島朋子さん指導のもとに行なわれた。

この巡検の主な目的は、気温の逆転と山腹の温暖帯について、実際にそれが起こりやすい場所で気温を観測することによって理解を深め、同時にアスマン式乾湿計の使用法を体得することと、この地形と気候の特色を生かした観光みかん園の見学と経営者の宮下さんからの聞きとり調査である。

観測地である風布へは、まず東武東上線で寄居駅まで行き、秩父鉄道に乗り換えて波久礼駅で降り、ここから車で現地へ到着した。各班3人ずつの5つの班が、各班で決めた約10地点の気温をアスマン式乾湿計で計り、クリノメーターで各地点の斜面方位を調べ、周辺状況や地表面の状態も記録していく。あとの2つの班が、移動観測の出発点とみかん園付近の2カ所の定点の気温を3分間隔で記録していくという調査が予定通り10時ちょうどに開始された。気温の逆転は快晴の明け方前によく起こるものだけに10時すぎでは遅いし、観

測も未熟なため良い結果は得られなかったが、アスマン式乾湿計に慣れ親しむことができたのが収穫と言えよう。

昼近くになって曇り空から雨になってしまい、昼食はみかん園の宮下さんのお宅の中でとらせていただいた。昼食後に観光みかん園の歴史と現状や問題点などをうかがった。他の場所より最低気温が高く、秩父鉄道とタイアップしたPRで観光客が呼べ、東京から比較的近いという多くの有利な条件に支えられている風布みかん園の発展ぶりや、厳冬・冷夏等の気候変動による被害や後継者不足が他の農業経営と共通した避けられない難問であることなどがわかった。

おみやげに小さいみかんを下さった宮下さん、そして調査に不慣れな私達を優しく指導して下さった三上先生と青島さんに深く感謝するとともにこの巡検で得たことを今後の勉強に生かしてゆきたいと思う。

(2月21日 三上教官指導)

# 三 浦 半 島 巡 検

武 田 栄 子

2年生の最後に行なわれた巡検は、三浦半島とその先にある城ヶ島だった。

まず京浜急行「三浦海岸駅」に集合し、夏はスイカ、冬はダイコンで有名な段丘地をバスに乗って通り過ぎ、油壺へ向かった。油壺の船着場付近は、美しい奇岩でうずめられている。この海岸の岩石は、岩渚が目だつ油壺火砕岩層で、北方で初声層と接している。この層は、白色のシルト層にスコリア(火山岩の破片)をたくさん含む黒色の地層がはさまれている。冬の平日であり、観光シーズンでもないので人影はまばらで、海岸を歩い

ていると、この地形を作りあげた自然の力をはっきりと見せつけられたような気がした。

私たちは油壺から遊覧船に乗り、城ヶ島を海から眺めた。城ヶ島は北原白秋の詩でよく知られている。船から見える城ヶ島は、白と黒のしま模様地層が太平洋の荒波によって浸食され、様々な海食地形を作っていた。船を降りて赤羽根岬あたりを実際に歩いてみた。赤羽根岬には、背洞門と呼ばれている大きな海食洞があった。海食洞を初めて見て波の力の大きさにあらためて驚いた。このあたりは初声層であり、黄かっ色の凝灰質砂岩

層と黒色のスコリア層の互層になっている。凝灰質砂岩層中には、斜交葉理がみられる。

赤羽根海岸は海食崖が高くそびえ、遠くから見ると、初声層の凝灰質砂岩層とスコリア層がしま模様となり、ゆるやかな向斜構造を示している。そこには白い鳥がたくさんいた。ウミネコの自然

棲息地となっているらしい。

様々な地形構造をはっきりと自分の目で確かめることのできた1日巡検は貴重な体験だったと思う。まだ観察の足りない点はいくつもあると思うが、地形学を初めて身近に感じたような気がする。

(3月2日 式教官指導)

## 東 北 巡 検

上 野 整 子

学生時代最後の東北巡検は、関西出身の人が多く私たちにあって最大の贈り物であった。旅の途中で巡検に参加した者、わんこそばがめあての者なども少なからずいたが、そこはくわしい事前調査をしたので許してもらいたい。

7月11日夕方、十和田市集合。夜行列車組は疲れを隠せない様子。元気だったのは集合前に十和田湖観光にいった約2名。初日は十和田市にて1泊する。ミーティングの後、明日のためにと皆おとなしくねむりについた。

12日はこの巡検メインの日。青森県農業試験場藤坂支場において聴き取りをする。

藤坂支場は、昭和6年、9年とあいついだ冷害に対し水稻の耐冷性品種の育成、冷害防止技術確立をはかるための冷害防止試験地として昭和10年に発足し、いくつかの品種を生みだしている。だが昭和46年の減反政策以来、水稻に関する研究費を削られているそうである。ここで冷害と農業の関係についての詳しい説明を聞いた。また実際に農家の方のお話をということで、県農業経営士の山崎福太郎氏にお願いした。特に興味深かったのは、繰り返し言われた農業は科学であるというお言葉だった。実際山崎さんは昭和55年・56年の冷害の際にも藤坂支場からのアドバイス通りに動き、被害が少なくすんだのだそうである。また、転作奨励金が出されても、転作は決してうまくはいっていないもようで、草の中に麦・大豆が申し分け程度に植えてある畑もみかけられた。今までの巡検で必ずといってよい程問題にあがった農家の花嫁問題がここでもいわれたが、やはりこれから

の農家にとっての切実な問題なのであろう。

次に冷害研究資料館へと行く。ここはこれまでの藤坂支場での冷害研究を一般に知らせるとともに、広く農業に対する理解と知識の向上を図る目的で、旧庁舎を利用して展示館としたものである。昔からの農具・民具・めくら暦や冷害実態パネル、標本玄米など興味をひくものばかりが展示されていた。

歩いて十和田市農協へ行き、八戸市内の旅館へとやっとたどりつく。夕食後、聞き取りをもとに学習会を行い、疲れていたようでその日はおとなしく就寝する(者もいた)。

13日は八戸市内を見学した後、海岸沿いに南下し、太田名部より陸中丸にて船の旅。事前調査をもとにあれこれ海岸地形について質問する殊勝な者もいれば、スカイダイビングしてくるうみねこに心を奪われ、“果てしなく 空を駆けゆく旅心”とばかりに旅情に酔っている者もいた。残念なことに、船に酔って客室に閉じこもったきりの者も少なからずいたが……。

とにもかくにも太平洋の荒波を真向から受けて屹立する断崖絶壁の連続、幾千万年にも及ぶ陸と海とのすさまじい戦いの跡をみせる奇岩岩礁の数々には圧倒されっぱなしであった。

うみねこのエスコートで浄土ヶ浜に着き、そこから宿泊地の国民宿舎「三王閣」へと向かう。すぐ近くに巨大な白亜紀の遺産である三王岩があった。この雄大きさに感動し、夕方と翌朝早くの2度も見に行った元気なグループもいた。

巡検最後の日は、防災の町田老の象徴である